



TITLE:

京大広報 No. 717

AUTHOR(S):

京都大学企画・情報部広報課

CITATION:

京都大学企画・情報部広報課. 京大広報 No. 717. 京大広報 2015, 717: 4533-4544

ISSUE DATE:

2015-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202949>

RIGHT:



京大広報

No. 717

2015.12



第10回京都大学ホームカミングデイを開催 —関連記事 本文4536ページ—

目次

環境安全保健機構の10年を振り返って 副学長・環境安全保健機構長 大寫 幸一郎	4534
〈大学の動き〉	
名誉教授懇談会を開催.....	4536
京都大学孜孜賞表彰式を举行.....	4536
第10回京都大学ホームカミングデイを開催	4536
〈寸言〉	
精魂こめて過ごした日々 小川 富太郎.....	4539
〈随想〉	
人に教わるということ 名誉教授 岡田 敬司.....	4540
〈洛書〉	
予期せぬ国際交流 橋本 渉.....	4541

〈話題〉	
社寺見学会を実施.....	4542
平成27年度総長杯(第1回ボウリング大会)を 開催.....	4542
宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を 開催.....	4543
11月祭を開催.....	4543
平成27年度京都大学森林科学公開講座「森林女 子会!女性研究者の観る森と木」を開催.....	4543
本学卒業生の竹内亜弥さんも一員的女子7人制 ラグビー日本代表がリオ五輪出場決定.....	4544
〈計報〉.....	4544

京都大学企画・情報部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

巻頭言

環境安全保健機構の10年を振り返って

副学長・環境安全保健機構長 大畠 幸一郎

平成16年に国立大学が法人化され、教職員の安全と健康、職場環境に関する所轄官庁が人事院から厚生労働省に移り、人事院規則に代わって労働安全衛生法が適用されることになりました。両者の間には、人事院規則に罰則規定がないのに対し、労働安全衛生法には罰則規定があるという大きな違いがあります。さらに労働安全衛生法体系には労働安全衛生施行令や労働安全衛生規則のほか有機溶媒中毒予防規則、鉛中毒予防規則、特定化学物質等障害予防規則など多数の有害業務に係る法令が含まれており、これらの法令を守ることが要求されることとなりました。これらに対応するため本学においても法人化から1年遅れの平成17年4月に環境安全保健機構が設置され、思いがけずその機構長の職につくことになりました。平成20年4月から2年間は工学研究科長を務めることになったため機構長の職を離れましたが、平成22年4月から現在に至るまで再び機構長を務めさせていただいております。

元来、労働安全衛生法は工場における定型作業を念頭に置いて策定されており、大学のような非定型な作業が中心の職場にはなじみません。そのため法人化直後には「なぜこのような法令を守らなければならないのか、守っていたら研究が進まない」などといった教員からの強い反発がありました。大学に合った管理方法を模索していくなかで3年ほどしてようやく落ち着いてきました。

平成23年4月には機構の機能を強化するため、これまで協力関係にあった環境保全センター、放射性同位元素総合センター、保健管理センターの三つのセンターを機構の中に取り込み、環境管理部門、安全管理部門、放射線管理部門、および健康管理部門の4部門を設置し、これらの部門と施設部環境安全保健課が環境安全保健に関する業務の実施に当たることとなりました。しかしながら4部門のうち安全



管理部門には現在まで教員が配置されておらず、実質、部門として機能していないという指摘をいただいております。幸い平成28年度からこの安全管理部門に教員が措置され

ることとなり、体制はより充実したものになります。しかし一方で、平成28年度から低温物質科学研究センターが担っていた寒剤(液体ヘリウムと液体窒素)供給業務を機構が担うこととなりました。新たに業務が加わりますが、寒剤利用者の研究が滞りなく継続されるよう体制の整備を急ぎたいと考えております。

次に、現在直面している具体的な問題を以下にあげます。一つ目は環境・エネルギーの問題です。温室効果ガスの排出量を削減することが地球環境の改善ならびに高騰する電気料金の抑制の観点からも大きな課題です。京都大学では平成20年度から5年の計画で環境賦課金制度を導入しました。環境報告書の発行を機に発想されたこの環境賦課金制度は、第Ⅰ期(平成20年～平成22年)に引き続き現在第Ⅱ期(平成25年～平成27年)に入っています。毎年ハード面で1%、ソフト面で1%、合計2%のエネルギー使用量(原単位)の削減を目標に掲げています。全学からの補助金1億2千万円と各部局からの、その前年の光熱水料費に比例した賦課金の合計2億4千万円を用いたギャランティード方式のESCO事業及び省エネ対策工事を行ってきました。「WINDOW構想」の中に環境賦課金制度の継続が謳われており、第3期中期目標・中期計画期間に向けた新しい第Ⅲ期環境賦課金制度の確立が大きな課題であると考えています。

この8年間は、費用対効果の大きな省エネ対策工

事を中心に行ってきましたが、今後はよりきめ細かな対策が必要となります。照明のLED化だけでは年間1,300トンのCO₂の削減は達成できません。一方で平成25年5月から電気料金が大幅にあがり、本学全体で平成26年度の使用電気料金は40億円になりました。さらに今年度も電気料金が上がり、6億あるいは7億円の増加が見込まれます。エコキャラバンなどで各部局とは様々な節電の取り組みについて議論させていただいておりますが、照明や空調だけでなく実験機器の運用などにも踏み込まなければならない状況かと考えています。教育・研究活動に支障のない範囲でなお一層のご協力をいただければ幸いです。

文部科学省が策定した「次期国立大学法人等施設整備5か年計画策定に向けた中間報告」(平成27年8月)では、重点的な施設整備の内容として「サステイナブルキャンパスの形成」に取り組むこととされています。本学においてもこれまで取り組んできたゴミの廃棄量の削減、紙並びに電気の使用量の削減を中心としたエコキャンパスの概念を包括したサステイナブルキャンパス構築に向けた取り組みを通じて環境負荷低減に資する整備を実施すること、環境配慮啓発活動を推進し構成員の環境意識の向上を図ることを第3期中期目標・中期計画に明記しています。

二つ目は事故・災害のない安全なキャンパス構築という課題です。事故・災害については通勤、通学時の交通事故や転倒事故が重大事故の多くを占めています。これに加えて研究室における実験上の事故が大学特有のものとしてあげられます。定量的、定性的な把握がまだ不十分であり、国立七大学の安全衛生管理連絡協議会で事故情報の共有化をはかり、傾向の分析をした上で対策を考えようという試みがスタートしたところです。ヒヤリ・ハット事例も含めて多くの事故・災害を報告していただくことが未然の事故防止につながります。一つでも多くの事故情報の提供をお願いします。

三つ目の課題は年々増加しているメンタルヘルス問題への対応です。学生さんの精神的な悩みについてはカウンセリングセンターと連携をとりながら、健康科学センターでも担当しています。一方教職員の方々からのメンタルヘルスの相談については外部相談窓口を設け一部業務委託をしながら健康科学センターの教員が関わっています。またセンターの教員は産業医として復職面接や過重労働面接にも携わっています。さらに産業医にはストレスチェックと面接指導の実施を義務づける制度(平成27年12月1日施行)による新しい業務が加わります。このストレスチェック制度は定期的に労働者のストレスの状況について検査を行い、本人にその結果を通知して自らのストレスの状況について気付きを促し、個人のメンタルヘルス不調のリスクを低減させることで、ストレスの要因そのものも低減させるものです。今年度より実施していますのでご協力よろしく願いいたします。

学内の禁煙についての取り組みは各大学で様々ですが、本学では分煙方式を採用しています。いずれは構内全面禁煙に移行すべきですが、男性職員の14%、男子学生の4%が喫煙しており、今すぐ全面禁煙とするのは難しい状況です。今後学内での議論を深めていきたいと考えています。

先にも述べましたように労働安全衛生法は大学にはなじまない部分があります。これについては大学が連携して国立大学協会に働きかけることも必要です。それと同時に大学間で安全衛生に関する情報交換を密にして協力しながら各大学が全体として高いレベルを目指していきたいと考えております。

最後になりましたが、構成員の皆様には機構の業務をご理解いただき、今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

大学の動き

名誉教授懇談会を開催

11月1日(日)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、第88回名誉教授懇談会を開催し、67名の名誉教授の他、総長、理事、副学長、部局長等あわせて79名が出席した。

秋に行われる名誉教授懇談会では、当該年度に名誉教授の称号を授与された教員(文系・理系各1名)による講話会を行うことが慣例となっており、文系からは櫻井芳雄 名誉教授(文学研究科)による「脳の情報表現の検出と制御」、理系からは中原俊隆 名誉教授(医学研究科)による「日英の最近の保健行政について」と題した講話が行われた。



挨拶をする山極総長



懇談会の様子

その後の懇談会は、山極壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、稲葉カヨ 理事・副学長による乾杯の発声により始まった。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに終了した。

(総務部(総務課))

京都大学孜孜賞表彰式を挙行

本学における教育、研究、社会貢献等の業績が極めて顕著であると認められた本学教員を表彰することにより、本学の一層の発展を期することを目的として平成24年に創設された京都大学孜孜賞の第3回



左から山極総長、森教授、清木理事

目の表彰式を、12月14日(月)に本部棟4階総長応接室で挙行了。

最初に、清木孝悦 総務・労務・人事担当理事による開式の辞が述べられ、引き続き、山極壽一 総長から、受賞者に表彰状と副賞が授与された。

最後に、清木理事より閉式の辞が述べられた後、記念撮影と懇談が行われ、終始盛会のうちに終了した。

受賞者は以下のとおりである。

所属	職位	氏名
理学研究科	教授	森 和俊

(総務部(人事課))

第10回京都大学ホームカミングデイを開催

11月7日(土)に「心」をテーマとし、京都大学同窓会が発足して10年目の節目となる「第10回京都大学

ホームカミングデイ」を開催した。同窓生(卒業生、修了生、元教職員)、教職員、学生など延べ約2,400

名の参加があった。

講演会は、満員となった百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、高見 茂 教育学研究科教授(京都大学同窓会幹事)の司会により進んだ。



挨拶を行う山極総長

はじめに、山極壽一総長(本学同窓会長)から、本学が歩む指針として、大学を社会や世界に開く「窓」として位置づけ、有能な学生や若い研究者を本学の開いた「窓」から、活躍できる世界に送り出す「WINDOW構想」を打ち出したこと、そして

これを実践して行きたいと挨拶があった。

続いて、学生サークル・能楽部観世会による静御前が源義経との別れの宴で舞う能「舞囃子 船弁慶」の上演に次いで、本学の大学院文学研究科に在籍していた文化勲章受章者のドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授による「京都大学時代に出会った人々」と題する特別記念講演があった。本学在学時代に出会った個性豊かな研究者との交流や楽しかった京都での生活について、ユーモアを交えた話があり、満員の会場は大いに沸いた。講演後には、キーン名誉教授と山極総長を客とし、裏千家の倉斗宗覚ぎょうてい業舩の解説により、医学部茶道部の椅子に座りながらお茶を飲む立礼式のお点前があり、お茶の心的一端に触れる機会となった。



「舞囃子 船弁慶」上演の様子

お点前の流れを受け開催した「くすのき茶会(懇親会)」では、京都・先斗町の舞妓による舞「紅葉の橋」などの披露や舞妓との記念撮影会を行い、華やいだなか応援団の演舞で幕を閉じた。

百周年時計台記念館 1 階の京大サロンでは学生サークルの心茶会による野点を開き、抹茶を提供するとともに、同館前庭のクスノキを中心に展開した



松尾依里佳さん

「クスノキ屋台村」では、農学研究科提供の野菜販売などの出店やテレビ等でおなじみのプロヴァイオリニストの松尾依里佳さん(経済学部卒)のトークショーなど特設ステージでの数々のパフォーマンスがあり、多くの参加者で大いに賑わった。

音楽会では、京都大学交響楽団による「ニルンベルクのマイスタージンガー」、「カルメン組曲」、「ラデツキー行進曲」、「ハンガリー舞曲第5番」の演奏があった。

また、登録有形文化財の尊攘堂や附属図書館の施設見学、総合博物館特別展「研究を伝えるデザイナー-研究者の思いをかたちにする工夫とこだわり-」にも多数の参加者があった。

このほか、百周年記念ホールで京大生のキャリア形成を考える交流イベントを行った。佐山展生 インテグラル代表取締役パートナー(工学部卒)による講演と、御立尚資 ボストンコンサルティンググループ日本代表(文学部卒)をファシリテーターに、各分野で活躍する卒業生5名によるパネルディスカッションを実施した。この後、会場を移して行った懇親会では、参加者の学生・卒業生と講師・パネリストらが情報交換し交流を深めた。

次回は、平成28年11月5日(土)に開催する。



音楽会

(総務部(渉外課))

京都大学時代に出会った人々(概要)



日本文学研究者(文化勲章受章)
ドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授

長年の夢が叶い、私が京都大学大学院文学研究科に留学できたのは、1953(昭和28)年のことでした。戦時中、アメリカ海軍の日本語学校で勉強するうちに日本に関心を持つようになったのですが、なかなか訪日の機会がなく、終戦から8年後、アメリカの財団の援助を受けて、ようやく京都への留学が実現しました。

当時、留学生にとって下宿先探しは大変でしたが、私は戦友の同志社大学教授のおかげで、素晴らしい下宿先に恵まれたのです。立派な門構えに囲炉裏や茶室があり、静寂に包まれ、そのうえ奥さんの手料理がおいしいという申し分ない下宿から、京都大学に通うことができました。

京都大学で受講したのは、野間光辰 教授の講義。

テーマが『曾根崎心中』に決まった時は、本当にうれしかった。ケンブリッジ大学時代に読んで感激し、英訳したいと思っていました。

留学中は中国文学の吉川幸次郎 教授、フランス文学の桑原武夫 教授など、専門以外の先生とも親しくなりました。特に桑原教授は、日本文学選集の編集をしている私に、石川啄木の『ローマ字日記』を勧めてくれ、私の啄木研究のきっかけを与えてくれた方でした。

学生との交友も広がりました。知られざる古典の掘り起こしに情熱を燃やした松田修さん、傑作とされる古典作品の退屈さを証明しようとした濱田啓介さん、のちに谷崎潤一郎の助手となった伊吹和子さんなど、個性豊かな友人を得ることができました。また生涯の友との出会いもありました。下宿先が同じだった、教育社会学者の永井道雄さんです。私は古典のことしか頭になく、新聞すら読まなかったのですが、永井さんのおかげで現在の日本にも関心を持つようになりました。永井さんは私より半年ほど年下でしたが、師でもあり、真に心が通い合う友人でした。

最後に、京都は本当に素晴らしいところです。私は93歳となり、友達の多くに会えなくなって寂しいのですが、60年以上も前に京都大学で過ごした歳月は本当に幸せでした。



(総務部(渉外課))

寸言

精魂こめて過ごした日々

小川 富太郎

当コラムに拙文を寄せることになったのは、工学部化学系講座の卒業生が東京地区で集う東京工化会の会長をこの4月より拝命したことによるものらしく、また先月は大学の桂キャンパスで開かれた工化会総会講演会で会場いっぱいの大学院生諸君に企業人の経験をお話する機会を頂きました。仲間内の呑み会幹事のごとく気安くお引き受けしてこりゃ大変、務まるかなと今になってあわてております。



昭和44年に高分子化学科を卒業し、今の会社で46年が経ちました。会社は400年以上の事業の歴史を継承するグループに属し、事業を通して世の為、人の役に立つべしと教えられ、教えてやってきました。

主力製品フェノール樹脂からして古そうなイメージですが、会社の実態は半導体、自動車、資源、医療など最先端産業に欠かせない機能素材を顧客と共同で開発するベンチャー集合体です。

入社後は、研究開発から始まり30歳代の中頃に4年間米国NYに駐在し技術調査・企画の仕事を担当しました。おりしも、IBMがパソコンを売り出し情報社会が大きく変わる時代でした。

後に、子会社社長としてシンガポールにも駐在しましたが、これらの海外勤務でグローバルな時代、マルチカルチャーの世界を経験することができました。日本の外にも世の中は繋がっている、我々も繋がって生きていくんだということを実感しました。

プラスチックは経済的な価格、安定した品質で大量生産できる材料です。分子設計、素材・部材設計、生産設備、サプライチェーンなどの進化で、更に様々な価値を付与できます。

社内外の様々な知を融合し、プラスチックで新たな顧客の価値、社会の価値を創造することが会社の

ミッションだと考えています。

驚いたことに、応援団OBの寸言欄登場は6月の今井さんに続いて今年二人目です！

会社では、精魂こめての対象は仕事でしたが、京大時代の私は応援団プラスバンド部活動に精魂こめていたように思います。学科の空気とは違って、異種混合が濃密な応援団活動は不思議な魔力をもっていた、説明のつかない集まりであった気がします。

何が価値か、何が使命か、我々の活動は価値を生むかなどなど、70歳に達した今も昨日のように酒場の場面を思い出します。

会社の仕事が一段落した数年前から、また忘れていた楽器を始めて音楽教室に通い始めたのも「あの日に帰りたい」ためか、あるいはボケ防止対策か。当時のプラスバンドの十八番はマーチの名曲「旧友」でした。(YouTubeにてandre rieu/ alte kameradenで検索)

総合大学の魅力のひとつは同時期を過ごした友人たちが多様、異種混合であることです。互いに時間の余裕ができてともに楽しむ仲間は価値ある財産ですが大学の同窓が多いし、楽しい。

今、京大は「おもしろ人材が、おもしろ研究をする、おもしろ大学」になってきたと聞きました。こんなすばらしい空間、時間を共有する人たちが世界に人のネットワークを拡げていけば世の為、人の役に立つことがいっぱいできるに違いない。もう一度入学はできないが、若者の応援に廻りましょう。

最後になりましたが、このような機会に恵まれたのも、卒業できるまで見捨てずあきらめずご指導を続けていただいた梶 慶輔 先生のおかげと心より感謝しております。先生がアセアンにご出張の際、シンガポールに駐在する私を訪ねていただいたことはありがたく、うれしい思い出です。

(おがわ とみたろう 住友ベークライト株式会社相談役 昭和44年工学部卒)

随想

人に教わるということ

名誉教授 岡田 敬司

定年退職後一年たって、新しい職場にも慣れてきたころ、クラシックギターの練習を再開した。我流ではあるが、若いころに少しいじっていたので、25年のブランクがあるとは言え、すぐに勘が戻るだろうと思っていた。ところが、以前弾けていたはずの曲が全く弾けない。譜面の読みが鈍くなっていること、もう一つは弦の押さえが甘くなっていること、これらが主だった理由に思えた。

一年近くあくせくしたものの、全然思い通りにならないので、一念発起して、レッスンを受けることにした。人様に謝金を払って教えるを受けるというのは、語学学校以外では初めてのことである。しかも今度は個人レッスンである。期待するところは大きかった。

私は自学自習で何でもやってきたように思う。思えば上がるなという声が飛んできそうだが、本当にそう思うのだ。小学校以来、心に残る良い先生に何人も出会った。しかし、あの先生にこれを習ったということがないように思う。確かに、かけ算の九九を暗記させられた光景は頭に残っているし、クラスの討論授業のあるやりとりは今でも鮮明に記憶に残っている。しかし、それらは私が学び取ったのだ。決して知識を注入してもらったものではない。そんな気持ち強い。先ほど言った自学自習というのは、これを指しているのだ。

これはどちらかというと現代の新しい教育・学習観である。私はこれにどっぷりとつかっていたのだ。いや、教育学をやり出してそういった知識が身につく遙か以前から、そんな風な、つまりすべて自学自習でやってきたという実感を持っていたのだ。



さて、65歳の手習いというわけで受け始めたレッスンは、このこれまでの私の教育・学習観を打ち砕くものだった。一回目のレッスンでは、私がやっと思出した曲を一つ二つ弾いてみて、聞いてもらった。「岡田さん、何をどう弾こうとしているのかはよくわかりますよ。」何ともつたない演奏を、上手だなどという嘘ではなく、そこに思想があることをほめてもらったのだ。

しかし、二回目から様子は一変した。「岡田さん、音が出ていませんよ。きちんと弾いてください。」これは何とも厳しい注文だった。私は下手なりに、一つの曲なりフレーズなりをひとかたまりの全体として弾く感じでやっていた、一つ一つの音を明瞭に出して、連ねていって曲にするというのとは違っていた。先生は百パーセント後の方の考えだったのだ。私は今でも、全体として曲を提示していくという弾き方を思想としては正しい、間違っていないものと思っている。しかしそれではいつまでもごまかし演奏を繰り返すだけに終わってしまう。それが、否が応でもわかってきた。上達しようと思えば、一音一音をはっきりと出し、それをつなげていってフレーズを、そして曲を構築していくしかないのだ。

この事実は、私にはなかなか飲み込みづらいものであった。それは私がなまじっか教育学や人間学をかじっていて全体論的な考え方になじんでいたからだ。しかし論より証拠。最初のころの録音より最近の録音の方が、音も大きく明瞭になり、表現力が上がっているのがわかるのだ。分解と総合。この近代の科学的手法の威力を思い知らされた。もちろんもっとずっと上のレベルに行けば、再度、分解と総合の手法を超えた全体論的なものが必要になってくるという予感はある。しかし現に、今、私は分解と総合の威力の恩恵を受けている。理屈抜きの納得であった。

(おかだ けいじ 平成25年退職、元人間・環境学研究科教授、現京都光華女子大学教授、専門は教育人間学、特に自律論と共同体論)

洛書

予期せぬ国際交流

橋本 渉

特にテーマ設定のない「洛書」欄に執筆する機会を頂戴した。そこで、この1年間で「予期せぬ国際交流」を2件経験したことをご紹介する。ただ、国際交流の活発な先生がご覧になれば、平凡なことかも知れないので、その点はご容赦いただくことを願います。



筆者は、微生物やその酵素などの研究を専門としている。昨年の今頃、博士課程の大学院生が細菌酵素の構造と機能を解析し、その研究成果を米国の科学雑誌に筆頭著者論文として発表した。雑誌に掲載されるやいなや、筆者とは全く面識のない米国の教授からメールをいただいた。どうもその教授も、ヒトミトコンドリアに局在する類似酵素を研究しているらしい。こちらの論文についてのご感想やご自身の研究紹介に続いて、「この論文に携わっている著者たちの中に、自分のラボでポストドクをしてくれる者はいないだろうか」との問い合わせがあった。これまでに国内外からポストドク募集の照会を幾つか受けたことがあるが、いずれもよくご存知の方からのご依頼であったので、今回のケースにはとても驚いた。その米国教授を調べてみると、精力的にご研究され、かなりのご業績の持ち主であった。ちょうど、筆頭著者の大学院生が学位請求講演を行おうとしていた頃なので、その大学院生をポストドク候補として考えた。大学院生にその話をしてみると、とても気に入って、「是非ポストドクとして渡米したい」とのことであった。そこで、米国教授にその大学院生を推薦することにした。日本では推薦状というと美辞麗句を並べることが多いので、大学院生の長所を取り纏めた推薦状を米国教授に送付したところ、「長所よりも短所を知らせて欲しい」と半ばお叱りのメールを受け取った。ポストドク話が壊れると大学院生が悲しむであろうし、教員として難しい要請であったが、

渡米すれば改善されると思われる語学力などを短所として書いて、推薦状を完成させた。その後はとんとん拍子に話が進展し、大学院生は学位取得後渡米し、充実したポストドク生活を続けている。その間も、米国教授とは研究や元大学院生の話題で何度かメールのやりとりはしているが、未だ面会にいたっておらず、お互い顔も分からずじまいである。

もう一つの国際交流は、インドとの共同研究である。筆者は、約10年前に文部科学省の支援を受けて1年弱の期間、米国で客員研究員として病原菌の細胞表層タンパク質の発現や機能を解析した。帰国後も、筆者を受け入れてくれた米国教授と定期的に連絡を取りながら、米国ラボでは行われていなかったタンパク質の立体構造を決定する課題に、こちらの博士研究員と一緒に細々と取り組んでいた。今年に入って、その研究成果を取り纏めた原著論文を発表した春頃、米国教授より、「そのタンパク質に関する研究課題をインドと共同で実施することになったので、日本の代表機関として従事して欲しい」との依頼を受けた。早速、こちらでクローニングしたタンパク質遺伝子や精製したタンパク質標品をインドの若手研究員に送付し、共同研究が始まった。しばらくすると、その若手研究員から、「二国間交流に関する研究助成に応募したい」との連絡を受けた。まだ共同研究実績がほとんどない状態での申し出に戸惑ったが、米国教授の後押しもあり、日印両国でそれぞれ申請書を作成し、現在審査を受けている。申請書を書くに当たって、その若手研究員が女性であることを初めて知ったが、一例目と同様、いまだ面識がない状態が続いている。

今回の2件の「予期せぬ国際交流」はどちらもこちらが受け身の態勢であったが、これまでの研究が多方面に展開していきそうで、大いに期待している。今後は、面識の有無にかかわらず、国内外を問わず、こちらから積極的に研究交流を図っていきたいと考えている。

(はしもと わたる 農学研究科教授 専門は分子微生物学)

話題

社寺見学会を実施

10月24日(土),平成27年度京都大学社寺見学会「秋のかやぶきの里をたずねて」が行われ,75名が参加した。当日は,さわやかな秋晴れとなり,常照皇寺(京都市),かやぶきの里,普濟寺(南丹市),宝林寺(亀岡市)を巡り,参加者は,それぞれの専門分野の講師の解説を興味深げに聞いていた。

常照皇寺では本堂で歴史について学んだあと,庭園を拝見,かやぶきの里ではかやぶきの集落を思い思いに散策,普濟寺では重要文化財である仏殿(観

音堂)を見学,宝林寺では重要文化財である阿弥陀如来坐像,薬師如来坐像,釈迦如来坐像,九重石塔を拝見した。

当日,解説いただいた講師は次のとおりである。

(歴史)西山 良平(人間・環境学研究科 教授)

(建築)山岸 常人(工学研究科 教授)

(造園)柴田 昌三(地球環境学堂 教授)

(美術)根立 研介(文学研究科 教授)



かやぶきの里にて記念撮影



(総務部(人事課))

平成27年度総長杯(第1回ボウリング大会)を開催

10月28日(水)午後6時30分からROUND1京都河原町店において,平成27年度総長杯(第1回ボウリング大会)が開催され,43チームが参加した。ストライクやスペアが出るたびに笑顔でハイタッチを交わし,ガターが出てもし合い,おいおいに盛り上がった大会となった。

大会結果は次のとおり。

<団体>

優勝:医学部附属病院「チームN」チーム(1,180ピン)

幣 憲一郎,登 由紀子,大島 志のぶ,嶋田 義仁
準優勝:南西地区共通事務部「南西戦隊トーキュー
ジャーピンク」チーム (1,165ピン)

宇野 圭助,新野 正人,江原 智彦,三宅 里枝

<個人>

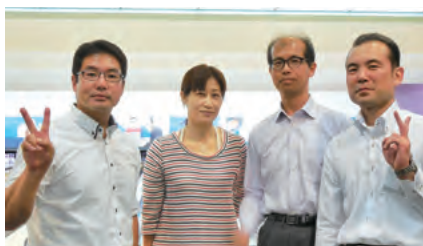
男性 優勝:幣 憲一郎(医学部附属病院)(372ピン)

女性 優勝:野村 真由美 (332ピン)

(桂地区(工学研究科)事務部)



優勝の医学部附属病院「チームN」チーム
個人優勝(男性の部) 幣 憲一郎さん(一番後ろ)



準優勝の南西地区共通事務部
「南西戦隊トーキュージャーピンク」チーム



個人優勝(女性の部) 野村 真由美さん
(左から2番目)

(総務部(人事課))

宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催

宇治キャンパスにおいて、外国人研究者・留学生に対する支援の一環として、11月9日(月)にリサイクルフェアを開催した。

宇治地区関係者から家庭に眠っている遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供するリサイクルフェアの開催は今年で10回目となり、例年と同様、外国人研究者・留学生と教職員との交流会も同時開催した。

リサイクルフェア会場となった、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースでは、関係者の協力により集まった約740点の物品が並べられ、研究者、留学生や、その家族など70名の来場者があった。毎年大



リサイクルフェア会場

人気のこの催しは、キッチンカウンターや組み立て式の家具から電化製品、布団、衣服、食器や鍋といった日常用品、子供用雑貨やおもちゃなど様々な物が出品され、単身者にも家族連れにも喜ばれている。

リサイクルフェア会場隣の交流会会場では、自己紹介タイムも設けられ、参加者はお茶を片手に和やかな雰囲気の中、交流を深めた。

また交流会コアタイムには、宇治地区各研究所の所長も参加し、寶 馨 防災研究所長の挨拶の後、時任宣博 化学研究所長、杉山淳司 生存圏研究所教授の紹介があった。その後引き続き行われた電化製品等の抽選会で、会場は大いに盛り上がった。

宇治キャンパスでは、年間で外国人研究者393名、外国人留学生100名程度が研究のために来訪、滞在しており、今後もこういった生活支援事業を続けていく予定である。

(宇治地区事務部)

第57回11月祭を開催

第57回目となる11月祭が11月20日(金)～23日(月・祝)に開催された。



吉田南構内の様子

キャンパス内は100店舗以上の模擬店が出展し、おまつり広場特設ステージ(吉田南グラウンド)では音楽ライブやダンスパフォーマンスなどさまざまな催しが行われた。好天に恵まれたこともあり、学生

のみならず、家族連れや中高生など多くの人でにぎわった。

最終日にはおまつり広場でフィナーレのファイヤーが焚かれ、4日間にわたる祭典に幕を閉じた。



フィナーレの様子



お祭り広場の出店

(教育推進・学生支援部(厚生課))

平成27年度京都大学森林科学公開講座「森林女子会！ 女性研究者の観る森と木」を開催

生存圏研究所と農学研究科森林科学専攻の共催により「平成27年度京都大学森林科学公開講座」を11月1日(日)に開催した。

この公開講座は、私たちにとって森林や樹木、木材がいかに重要であることを深く理解してもらうことを目的として、毎年開催している。

今年は、「森林女子会！ 女性研究者の観る森と

木」をテーマとし、ユニークな研究を行っている5人の女性研究者が、最先端の研究をわかりやすく紹介し、さらにより理解を



熱心に講演を聞いている参加者

深めてもらうためフリーディスカッションを行った。
延べ60名を超えた参加者は熱心に受講し、森や木

の大切さを知る秋の1日となった。
(生存圏研究所・大学院農学研究科)

本学卒業生の竹内亜弥さんも一員の女子7人制ラグビー日本代表がリオ五輪出場決定

11月28日(土)・29日(日)に開催された「女子7人制ラグビーアジア予選 第2戦 日本大会」で本学卒業生の竹内亜弥さん(平成21年3月 文学部卒業)も一員の日本代表がリオデジャネイロ五輪出場を決めた。



スリランカ戦での竹内選手

竹内選手が五輪日本代表に選ばれれば本学関係者としては昭和43年にメキシコ五輪の馬術競技に出場した荒木雄豪さん以来、48年ぶりの五輪出場となる。

オリンピックに出場した本学関係者一覧

年	大会	種目	氏名
昭和3(1928)年	アムステルダム	陸上100m、200m	相澤 巖夫
昭和7(1932)年	ロサンゼルス	陸上走幅跳	田島 直人
昭和11(1936)年	ベルリン	陸上三段跳	田島 直人
昭和11(1936)年	ベルリン	陸上走幅跳	田島 直人
昭和11(1936)年	ベルリン	陸上三段跳	原田 正夫
昭和11(1936)年	ベルリン	陸上ハンマー投	松野 栄一
昭和27(1952)年	ヘルシンキ	陸上 4×400mリレー	山本 弘一
昭和31(1956)年	メルボルン	馬術	川口 宏一
昭和35(1960)年	ローマ	馬術	荒木 雄豪
昭和43(1968)年	メキシコ	馬術	荒木 雄豪

(企画・情報部(広報課))

訃報

このたび、^{こうだ たけひさ}幸田武久 准教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に氏の略歴、業績等を紹介いたします。

幸田 武久 准教授



幸田武久先生は、9月30日逝去された。享年61。

先生は、昭和53年3月京都大学工学部精密工学科を卒業、同55年3月同大学大学院工学研究科修士課程精密工学専攻を修了、同58年7月同博士後期課程を修了し、同58年7月に京都大学工学博士の学位を取得された。昭和58年4月通商産業省工業技術院機械技術研究所技官に採用、同研究開発官、同主任研究官を経て、同63年4月に京都大学工学部助手に採用、平成3年4月同学部助教授に就任、同8年4月同大学院工学研究科助教授に配置換となり、航空宇宙工学専攻にて航空宇宙システム工学講座を担当された。

先生は、社会・安全システム科学、システム制御、中でも信頼性工学に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、システムの信頼性・安全性解析、動的システムの故障分析などの分野において多大な貢献をされた。主な著書に『新FTA技法』等がある。

また、ヒューマンインタフェース学会理事・評議員、日本信頼性学会評議員、日本管理設備学会関西支部役員等の要職を歴任されるなど、システム工学・信頼性工学分野に多年にわたり貢献された。さらに、米国 IEEE Reliability Society において、Associate Editor および System Safety Technical Committee Chair を歴任され、国際的な活動にも大きな役割を果たされた。

(大学院工学研究科)